



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 55

Nov. 2014

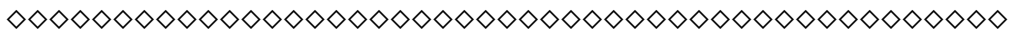
今号のトピックス

2015 年 1 月から幹事が交代します。問合せ先にご注意ください。
→ 2 ページ

12/13 (土) 大阪学院大学にて学会講演会が開催されます。
→ 8 ページ

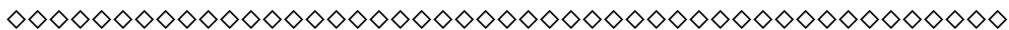
来年 3/5 ~ 3/8 開催の福島大会の詳細・申込情報が掲載されています。
→ 10 ページ

2015 年度の会費納入は 12 月末が期限です。
→ 20 ページ



目 次

次期 (2015-2016 年度) の幹事について	2
諸報告	
2014 年度野外研修会実施報告	3
八甲田山・花の彷徨 ~ 2014 年度野外研修会の参加報告 ~	5
お知らせ	
2014 年度日本植物分類学会講演会のお知らせ	8
日本植物分類学会第 14 回大会 (福島大会) および 2015 年度総会のご案内 ...	10
第 30 回国際生物学賞記念シンポジウム開催のお知らせ	19
会員消息	20



次期（2015-2016年度）の幹事について

庶務幹事 志賀 隆

次期の会計幹事を岡山大学の池田さん，図書幹事を兵庫県立人と自然の博物館の高野さん，ニュースレター担当幹事を国立科学博物館の堤さん，ホームページ担当幹事を岡山理科大学の矢野さんにお引き受けいただきました。これに伴い，2015年1月1日から学会の連絡先が次のとおりに変更されます。お間違えのないようご注意ください。なお，庶務幹事は新潟大学の志賀が引き続き担当することになりました。会務全般への問合せは従来と変更ありませんので，何かありましたら志賀までご連絡下さい。

会計幹事（入会申込み，住所変更，退会，会費納入，購読申込みなど）

池田 啓（いけだ はじめ）

〒710-0046 岡山県倉敷市中央 2-20-1

岡山大学 資源植物科学研究所

電話 & ファックス：086-434-1240

電子メール：ike@okayama-u.ac.jp

図書幹事（バックナンバー・文献閲覧の問合せ）

高野 温子（たかの あつこ）

〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘 6 丁目

兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境評価研究部

電話 / ファックス：079-559-2011/079-559-2019

電子メール：takano@hitohaku.jp

ニュースレター担当幹事（ニュースレター原稿送付先）

堤 千絵（つつみ ちえ）

〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1

国立科学博物館 植物研究部

電話 / ファックス：029-853-8428/029-853-8998

電子メール：tsutsumi@kahaku.go.jp

ホームページ担当幹事（ホームページ・メーリングリストに関する問合せ）

矢野 興一（やの おきひと）

〒700-0005 岡山県岡山市北区理大町 1-1

岡山理科大学 生物地球学部 生物地球学科

電話 & ファックス：086-256-9612

電子メール：yano@big.ous.ac.jp

諸報告

2014年度野外研修会実施報告

米倉 浩司（東北大学植物園）

2014年度の野外研修会は、「八甲田山系ブナ帯の植物」と題して、7月11日（金）～13日（日）の3日間、青森県の八甲田山の南西側中腹に位置する東北大学植物園八甲田山分園を拠点として行われた。参加者は、受け入れスタッフの米倉を含めて17名であった。折悪しく直前に季節外れの台風11号が西日本から東日本にかけて襲来したため、2日前の時点では開催すら危ぶまれたが、幸いにも台風が予定よりも1日早く去ってくれたおかげで、参加者もキャンセルなしに無事に到着でき、当日は天候にも恵まれて成功裏に研修会を終わらせることができた。関西や関東方面からの参加が多かったが、九州の福岡県からの参加もあった。北日本からの参加者1名のみと少なかったのが少々意外であった。

第一日目（7月11日）、15時酸ヶ湯温泉着のバスで参加者が八甲田山分園（標高900m）に到着するのを待って、簡単なガイドスの後に園内の散策路を一周した。園内には古い爆裂火口の跡に発達した湿原があり、そこではツルコケモモがちょうど満開であった。また、湿原周辺の林では、ハクサンシャクナゲが盛りを過ぎていたもののまだ花が残っており、ハナヒリノキ、ウラジロヨウラク、アカモノ、シラタマノキなど火山地帯に特徴的なツツジ科の花を多く見ることができた。園内に1本だけある珍しい雑種のウラジロコヨウラク（ウラジロヨウラク×コヨウラクツツジ）は、残念ながら花は2輪ほどを残して散ってしまっていたが、参加者は何とか残った花をカメラに収めていた。また、アリドオシランやジガバチソウなどのランが開花中であった。5時に八甲田山分園に隣接する酸ヶ湯温泉に入浴に行き、その後酸ヶ湯からの食事で夕食を済ませた後、夜に園内の実験棟に移動し、八甲田山の植物に関する簡単な解説を行った。解説後は、実験棟内の植物標本室で、八甲田山の植物標本を見ながらササやスゲの仲間などについて意見交換が行われた。

第二日目（7月12日）、酸ヶ湯温泉での朝食後、手配しておいた同温泉のバスに8時半に乗り込み、八甲田山系の北東側（したがって酸ヶ湯とは反対側に当たる）田代平（たしろたい；標高550m）へと観察に向かった。ブナ林の中を抜けて30分程度のドライブの後、旧いカルデラの底に位置する田代平の北側半分を占めている十和田市営牧場の入口でバスを降り、まず牧場の入口付近の湿草原を散策して、ヤマトキソウ、ミズギク（蕾）、トキンソウ属の1種（蕾ながらおそらく未記載分類群）、オニシモツケなどを見た後、



図1. 田代平の駒込川沿いを散策中の光景。左下の大きな葉はアキタブキ。



図2. 駒込川沿いの昼食風景。

牧場内をしばらく歩いて、牧場南縁を通る送電線の管理用道路へと歩みを進めた。この管理用道路は田代平の盆地中央を南東から北西に流れる駒込川の北岸に沿って続いており、この辺りの本来の植生であるブナ-ミズナラ林、ハンノキ-ヤチダモ湿地林、伐採されて光が十分に差し込む場所がモザイク状に入り交じり、この地域の植物観察には適した場所である。明るく湿った伐採地では、カラフトドジョウツナギ、オオカサスゲ、グレーススゲ、フッキソウ、オオマルバノホロシ、シロバナカモメヅル、ヒメゴヨウイチゴ、シオデ、イケマ、ミヤマカラマツなどの花や、エゾノクロウメドキやカンボクの実を観察でき、やがてハンノキ-ヤチダモ湿性林に入ると林床にはミズバショウ、ツルクツネノボタン、ネコノメソウ、オニシモツケ、エゾメシダ、ツクバネソウなどが生育していた。管理用道路の終点付近では、八甲田山系ではこの付近にしかないカラフトダイコンソウ（青森県では他に下北半島で知られている）が、花は終わっていたものの道沿いに小群落をなしているのを見ることができた。

牧場に吸い込まれる管理用道路の終点で記念撮影をした後、同じ道を引き返し、途中にある駒込川沿いの木陰の路傍で昼食の弁当を食べた。川の中にはバイカモが生育していたが、残念ながら時期が少し早く、高枝切りを用いて採集を試みたものの蕾しか採れなかった。

昼食後は植物の観察を続けながら牧場入口に戻り、そこから徒歩で駒込川の南岸に位置する田代湿原へと移動したが、昼過ぎの炎天下で日蔭がないため思いのほか体力を消耗し、湿原入口の八甲田温泉に着くや自動販売機で冷たいジュースを買って求める人が続出した。田代湿原は盆地に点在する湿原の中では最大でかつ最も自然度が高いもので市の天然記念物に指定されており、木道が整備されて八甲田の湿原植物の観察には便利な所である。散策時に満開になっていると期待されたキンコウカはまだ満開には早すぎたが、トキソウは当たり年で多くの花を見ることができた。オゼニガナは花が終わっていた。他に湿原植物で目ぼしいものとしては、ヤチヤナギ、モウセンゴケ、ハイイヌツゲ、イソノキ、ヒメシャクナゲ、ウラジロレンゲツツジ、ホソバナシバナ、ゼンテイカなどを見ることができた。



図3. 田代湿原。遠景の山は八甲田山系の雑岳（左）と高田大岳（中）。

15時半過ぎに田代湿原入口に手配しておいた酸ヶ湯温泉のバスに乗り込み、八甲田山分園へ帰る途中、1ヶ所参加者からのリクエストに応じてシウリザクラの枝を採集するために寄り道し、その後分園へと戻った。若干到着は予定よりも遅れたが、入浴時間の17時には間に合った。その夜は酸ヶ湯温泉への入浴、夕食の後は、各自標本の作製や情報の交換、懇談など思い思いに過ごした。



図4. 八甲田山大岳中腹でヒロハテンナンショウを観察中のメンバー。手前が橋本光政氏。

第三日目（7月13日）は八甲田山主峰の大岳への登山（参加者10名）を行った。登山ルートは八甲田山分園から仙人岱ルートで南側から大岳山頂を極め、そこ

で昼食の後に北側へ回って毛無岱をまわって酸ヶ湯温泉へと下りる一般的なもので、観察しながらで5時間半ほどの周遊コースであった。仙人岱上側の薬谷雪溪にはまだかなりの雪が残っており、周辺にはヒナザクラやイワイチョウなどの雪田植生を特徴づける花がちょうど満開であった。その他高山帯で見られた代表的な花としては、タカネザクラ、マルバシモツケ、ゴゼンタチバナ、イワカガミ、アオノツガザクラ、コケモモ、カラフトイチヤクソウ、ミヤマリンドウ、キタヨツバシオガマ、ウサギギク、クモマニガナ、マイヅルソウ、コメススキ、ハクサンチドリなどがあり、またミヤケスゲ、キイトスゲ、コハリスゲ、イトキンスゲ、ハガクレスゲなどのスゲ類も観察できた。山頂は風が強く、曇っていて眺望があまりきかなかつたのは少し残念であった。帰りがけの毛無岱湿原では、休憩所でオゼニガナの花を見る事ができた。

参加者は以下の通り（五十音順、敬称略）：飯田 順子、石渡 友梨、宇那木 隆、大森 鉄雄、織田 二郎、川辺 龍太郎、久米 修、古賀 佳孝、権藤 敬子、中村 健爾、中村 直樹、西野 貴子、西野 友子、橋本 光政、支倉 千賀子、山脇 和也、米倉 浩司。

最後に、今回の観察会を成功裏に終わらせることにご助力下さった酸ヶ湯温泉株式会社と十和田市営牧場の関係者の皆様にお礼を申し上げます。

八甲田山・花の彷徨 ～ 2014年度野外研修会の参加報告～

橋本 光政

研修会の予定日の1週間前は超大型台風の影響予報で毎日のテレビの天気予報は欠かせなかった。参加者全員が発射しようかすまいかと迷いに迷った。

私は姫路から二人で車で出発し研修日程の行きと帰りを利用して早池峰山と白神山地に特別研修の計画だったが、台風の進路と車の走行予定が合致してとても出発できそうになかった。

10日の朝東北大学の米倉博士からのメールが入っていた。11日からは台風も去り計画通りの実施予定とわかった。早速準備をして昼過ぎ姫路を発った。上越市の手軽で便利な「ホテル門前の湯」で前泊し、翌日の集合時刻前には東北大学植物園八甲田山分園に着いた。約1200kmの走行だった。花を求めた彷徨の前に日本の約半分を彷徨した。1週間前の予報に反して小雨が時々あった程度の好条件で、黒石ICを出る頃には青空すら見えてきていた。

すでに数名が集合時刻前の自由散策を楽しんでおられた。全員そろっての研修は八甲田山分園の管理棟を中心に園内を案内いただいた。米倉 浩司博士の解説は微に入り細に入り初めて聞く内容が多い。ま

ず管理棟を出たところの雑草風にはびこったコウリンタンポポ（戦前に樺太から移入したものという）。園内ではウラジロコヨウラク（ウラジロコヨウラクとコヨウラクツツジの雑種で *Menziesia* × *kamadae* Mochizuki だと聞いた）。解説は早く園内を回る足も速い。管理棟に帰って見ると三つの班に分かれて回っていた。ミズバショウやツルコケモモの自生する池や湿地（極楽沼）には案内後の空いた時間を利用しての出会いとなったが、それだけ余裕のある時間配分に助けられた。九州の古賀さんや、四国の久米さんは前日からのお泊まりで、すでに植物園内は丹念に探索されていてRDB筆頭級のアリドオシラン、ミヤマフタバラン、ジガバチソウなどの自生株なども教えていただき感動の観察記録から始まった。

夕食前にはそろって、歩いて数分ばかりのホテル酸ヶ湯温泉に一風呂浴びに出かけた。ホテルと八甲田山分園は素晴らしい関係が維持され、研修に来る学生等（今回の我々を含めて）は研修に汗を流す一方朝夕のエネルギーをしっかりと蓄えることができる。仙人風呂の混浴で有名という温泉は今までに経験したことのないすばら

しい泉質だった。夕食は同温泉で作られた料理を管理棟に持ち帰り、自炊で炊いたご飯とお菜の配膳は参加者全員で行った。料理とアルコールを楽しみながら和やかな雰囲気でもあった。

夜の研修会は実験棟に移っての標本作製、標本検討、スライド会であった。実験棟は古い建物ではあったがその中には酸ヶ湯温泉の開発者の郡場直世を父に持つ後の京都大学植物生理学の教授郡場寛や、その母の郡場フミの薬草標本が残されており、また、それ以降の東北大学の重鎮教授の写真や遺稿などが最新の標本と共に保管されるなど東北のフロア解明の発展を理解する上で意義深い研究施設であった。続いた米倉博士のスライドは八甲田山のみならず東北地方の植物生態や分類地理の特長をわかりやすく図式化されたもので、植物園見学や明日以降の野外研修の理解を深め、意欲を誘発する内容で有難かった。

二日目・チャーターした酸ヶ湯温泉のバスで酸ヶ湯とは八甲田山をはさんで反対側・北東側にある田代平の牧場前まで行った。途中のバスの中から道路周辺の見事なブナ林に見とれ、また映画にもなり新田次郎作『八甲田山死の彷徨』で著名な雪中行軍遭難者銅像が見えた。美林は終わり、下車した前の草原内ではヤチダモ、オノエヤナギが散在し、ハリイ、ウラジロレンゲツツジ、オクヤマザサ、ヤマトキソウ、ミズギク等を観察。八甲田山を正面に見ながら次の駒込川へ、牧場



2014年7月11日 東北大学植物園分園実験棟

の棘状鉄線柵をぐりながらの観察であった。米倉博士の誘導がなければ到底入れない観察ルートである。真っ赤な果実をいっぱいつけたキンギンボク、関西では見られないシロヤナギ、カラフトドジョウツナギ、シロバナカモメヅル、トウゴクサイシン等々と続く。きれいな清流にはバイカモも一役を演じてくれた。花には少し早く、すくい上げてみると小さなつぼみをつけていた。川沿いの送電線の管理道はブナやミズナラ、アカイタヤ等の落葉樹が続き快適な観察道でミズバショウ、ウメガサソウ、オオバクスミレ、テイネニガクサ、ヒメゴヨウイチゴ、ベニバナイチヤクソウ、ヒメザゼンソウ、ヒョウノセンカタバミ、ギョウジャニンニク、チシマネコノメ、オニノヤガラ、エゾボウフウ、エゾメシダ等々昨夜の東北のフロアの特色全開である。

清流を前にして酸ヶ湯特製の弁当の食後、元に戻り八甲田温泉まで舗装道路を歩いた。雲が無いと青森とはいえ炎天下の行軍は水分補給を要求していた。八甲田温泉前で小休止後、目の前の八甲田山の火山活動によって生まれたカルデラ湖が、長い年月をかけ湿地と化したという青森県指定天然記念物の田代平湿原に入った。メインのワタスゲやウラジロレンゲツツジ、ニッコウキスゲの花は終わり、ヤチヤナギ、キンコウカ、ナガボノシロワレモコウの葉が目立つ。池塘には真っ赤なモウセンゴケ、その間にトキソウの薄紅色の花が点在、真紅の花のサワランも自生するらしいがその株には出会えなかったが、貴重な湿原を満喫して、皆満足顔であった。

迎えに来てくれた酸ヶ湯温泉のバスに乗車、分園への帰途シウリザクラの自生株のある萱野茶屋の手前でその観察と採集をさせていただいた。果実をたくさん着けた枝に米倉博士の高枝切りが届きほぼ全員が初めての体験を喜んだ締めくくりであった。

三日目・朝食は前日同様そろってホテルで泊まり客に混じってのバイキング形式：温泉自家製の特産物から和食、洋食を含めて1日のエネルギーをしっかりといただいた。食後第一次研修会は解散し、学会野外研

修担当の西野 貴子さん他若干名は帰途に就かれ、希望者だけの八甲田山の最高峰・大岳登山となった。青森市主催の開山日とあってターミナルにはバスや人がたくさん待ち構えていた。出発は重なったが学会チームは米倉ルートに入って途中まで単独観察の後、合流したが要所要所で植相の解説を受けながら登ることができた。ダケカンパとオオシラビソ混生林が続き、硫気孔からの硫化水素ガスの噴出で一面が枯れ山腹になっているところもあった。すばらしい酸ヶ湯の温泉源もこのような厳しい自然下で集水利用されていることを思うと尚いっそう泉質の尊厳さを感じた。林床のササにわずかに花があった。葉の裏に毛のあるオクヤマザサという。湯ノ沢ルートを登り視界も開けた森林限界の近く、仙人岱の表示があり、避難小屋もあった。周辺の草原にはヒナザクラがいっぱい白い花をつけ、チングルマや、ミヤマキンポウゲ、イワイチョウ、イワカガミ等々がお花畑を展開してくれていた。変わり者にはキタヨツバシオガマ *Pedicularis chamissonis* Steven var. *hokkaidoensis* T. Shimizu (花の段数が多く花冠は萼近くで鋭角的に曲がり草丈も 70cm)、ジンボソウ *Luzula jimboi* Miyabe et Kudô subsp. *jimboi* (地質学者の神保子虎による)。ミヤマナギが満開であったが低山のものと同種は同じで *Salix reinii* Franch. et Sav. であると教わった。

ハイマツ帯の中の鏡池にはクロサンショウウオの卵塊が浮き、タマミクリの沈水葉が繁茂していた。

山頂 (1585m) に着くと風はいっそう強く、石積みされたケルンの傍にできるだけからだを寄せるようにして風を避けておにぎりを開いた。早々に下り始めると登りになかったウサギギクやミヤマオダマキが気の毒なほど強風に耐えていた。大きく植生破壊がおき、その改善に多くの垂木が各所に積まれた痛々しい場面を縫うようにして下った。井戸岳との鞍部に作られた大岳避難小屋に着くとさすがに風は収まり、ふたたび観察を続行しながらの下りとなった。ミズバショウがわずかではあるが雪融け直後の小さな雪田の周囲に



2014年7月13日 八甲田大岳山頂

花を残していた。その頃から小雨が落ちてきた。

急な階段が目の前に迫り、両側にはミヤマナラの灌木林が広がりその前方には広い草原 (毛無岱) が広がっていた。階段を下って延々と続く木製の棧道の両側にはワタスゲが白綿をなびかせて見事な風景を作り出していた。小さな池塘の傍にはマルバマンサクがてかてか光る葉を広げ、その株元には初対面のオゼニガナが小さな白い花を揺らせ、次の池塘の傍にはホロムイソウが茶色の果実を點頭して群がっていた。このホロムイソウは岐阜県の天生峠で見て以来 40 数年ぶり感激もひとしおであった。また、展望台が作られそのそばの池にはミズバショウやミツガシワの大型草本が目立ち、雪田の周囲はアオモリドマツの低木から中高木が取り囲んでいた。登りも下りも今回は球果を見ることはなかった。裏年らしい。深田久弥の『日本百名山』の一節「豪華な絨毯を敷いたようなその原には、可憐な沼が幾つも点在し、その脇には形の良いハイマツが枝を広げている。周囲には背の低いアオモリドマツが風情を添え、その結構な配置といい、背景の効果といい、まことに神の巧みを尽くした名園のおもむきがある」その実体験そのものであった。後は、ブナを主とする林床の道を傘を差したままどんどん下って酸ヶ湯温泉の真上に出た。見事なブナの純林に再びカメラを出して 2, 3 枚撮った後、急坂を下ってホテル前の駐車場

に着いた。長い下りで足も疲れていたが全話になった参加者にお礼を告げてお別れを
員無事に多様な景色と植物に満足した顔した。一生の記憶に残るすばらしい野外研
で管理棟まで帰ることができた。野外研修修会でした。
再度の解散で米倉浩司博士や互いにお世

お知らせ

2014年度日本植物分類学会講演会のお知らせ

講演会担当委員 岡崎 純子

2014年度の日本植物分類学会講演会を次のとおり開催します。なお、会場は大阪学院大学の林一彦先生にお世話いただきます。また今回は林一彦先生には特別講演もお願いしております。

【日時】2014年12月13日（土）午前10時～午後5時

【講演会場】大阪学院大学2号館地下1階2号教室（02-B1-02教室）

〒564-8511 大阪府吹田市岸部南2丁目36番1号（電話：06-6381-8434）

【プログラム】

- 10:00 - 10:05 ご挨拶 角野 康郎（学会長）
 10:05 - 11:05 矢野 興一「アジア産スゲ属植物の多様性とその進化」
 (11:05 - 11:15 休憩)
 11:15 - 12:15 小林 禧樹「淡路島の植物相の特徴と注目される植物－改訂増補版を出版して」
 (12:15 - 13:15 昼食)
 13:15 - 13:40 掛澤 明弘「屋久島高地における植物の小型化現象－ヒメコナスビを例にして－」
 13:40 - 14:40 菅原 敬「日本産カンアオイ属植物，特に常緑性カンアオイ類についての分類学的研究の現状と課題」
 (14:40 - 15:00 休憩)
 15:00 - 16:00 長谷部 光泰「陸上植物の面白さ」
 16:00 - 16:25 末次 健司「従属栄養植物の奇妙な生活－植物が光合成をやめる際、必要になる適応とは？」
 16:25-16:50 特別講演 林 一彦「高貴なユリ カサブランカの交配親でもある絶滅危惧種タモトユリの現状」

【その他】

参加費としてお茶代（100円）を徴収いたします。また講演会終了後、大阪学院大学職員食堂（17号館1階）で懇親会を行います（当日申し込み、学生割引もあります）。

【会場までのアクセス】

JR 東海道本線岸辺駅あるいは阪急京都線正雀駅から大阪学院大学までともに徒歩5分。

http://www.osaka-gu.ac.jp/p_student/index.html の「交通アクセス」と「キャンパスマップ」をご覧ください。

【講演内容（執筆は各演者）】

「アジア産スゲ属植物の多様性とその進化」

矢野 興一（岡山理科大学生物地球学部）

スゲ属植物（カヤツリグサ科）は被子植物のなかで多様に分化した分類群の1つである。特に東アジアでの多様性が高く、様々な環境に生育している。しかしながら、互いによく似た種が多く、分類が難しい分類群でもあり、研究者によって分類体系も異なる。近年、DNAによる系統解析からスゲ属の系統関係や進化について多くの新しい知見が得られてきており、その研究成果や研究課題などについて紹介する。

「屋久島高地における植物の小型化現象－ヒメコナスビを例にして－」

掛澤 明弘（京都大学大学院理学研究科）

屋久島の高地では植物体が近縁種の1/2～1/10程度の大きさで成熟する小型化現象が多くの分類群で報告されている。それらの一つであるヒメコナスビでは、その祖先種で低地に生育しているコナスビに比べて特に葉における小型化が顕著であり、その要因は細胞数と細胞サイズ両方の減少であることがわかっている。このような形態形質の差異に遺伝的なバックグラウンドが存在するのか、また、それが適応進化の結果であるのかを明らかにすることを目的としておこなった、共通圃場実験と集団遺伝学的解析による研究の成果を紹介したい。

「淡路島の植物相の特徴と注目される植物－改訂増補版を出版して」

小林 禧樹（兵庫県植物誌研究会）

2年前に「淡路島の植物誌」の改訂増補版を出した。旧版発行後の調査および頌栄短期大学所蔵標本の同定作業の進展によって、新しい植物が見出されたほか、最近の調査でイズハハコやタシロランなども発見された。淡路島はこうした希少種やミミガタテンナンショウのような隔離分布種がみられる一方で、他地域ではごく普通のクロモジ、ハナイカダ、タカノツメが分布しないという「分布の謎」を秘めた島でもある。これらについて、肩のこらない楽しい話を紹介したい。

「日本産カンアオイ属植物、特に常緑性カンアオイ類についての分類学的研究の現状と課題」

菅原 敬（首都大学東京・牧野標本館）

日本列島で多様な種へと分化した植物の一つにカンアオイ属がある。その中でも常緑性のカンアオイ類の分化は著しく、狭い地域のなかで多くの種が認識・記載されてきたが、一方で現在も未記載のまま残る分類群が存在する。これは地理的変異や形態的特徴の把握が難しいためであるが、このような植物を対象にした分類学的研究の一端を紹介するとともに、今後の課題について触れてみたい。

「陸上植物の面白さ」

長谷部 光泰（基礎生物学研究所）

野外で植物を見つけて名前を調べるのは面白い。でも、さらに、個々の植物の形をよく見てみるとさらに面白いことがたくさんあります。そして、世界中で行われている最新の研

研究成果や生物学のいろいろな分野の知見を統合してあらためて形を見直すとますます面白いが出てきます。私が大学で行っている植物進化学の講義 (<http://www.nibb.ac.jp/plantdic/blog/>) から、食虫植物、動く植物、陸上植物の祖先、コケの受精方法、植物の生活史、コケシノブ、コハコベの葉序などを時間の許す限りオムニバスで紹介します。

「従属栄養植物の奇妙な生活－植物が光合成をやめる際、必要になる適応とは？」

末次 健司（京都大学大学院人間・環境学研究科）

皆さんは「植物の特徴を挙げよ」と言われた場合、どのように答えるだろうか。多くの人が、葉緑素を持ち、光合成を行うことを挙げるに違いない。しかしながら、植物の中にも光合成能力を失った従属栄養植物が存在する。本講演では、(1) 様々な従属栄養植物を紹介し、(2) それらの従属栄養植物が特異な生活史を全うするため、どのような適応を遂げたのか紹介したい。

「高貴なユリ カサブランカの交配親でもある絶滅危惧種タモトユリの現状」

林 一彦（大阪学院大学経済学部）

タモトユリは、江戸時代に毎年薩摩藩より将軍家に12本献上され、自生地は藩の政策で秘密にされていた。そのため自生地は保護され、その後第二次大戦後は、米国の占領地内におかれた。昭和27年の日本返還時には、鱗茎は占領時に島民が欧米諸国へ密輸出したため激減していた。園芸的価値が高いため幾つかの調査が試みられたが、ここ10年自生が確認されていなかった。この度自生を確認したので自生地の模様を報告する。

日本植物分類学会第14回大会（福島大会）

および2015年度総会のご案内

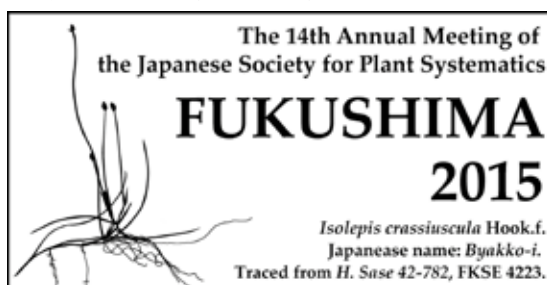
第14回大会会長 黒沢 高秀

日本植物分類学会第14回大会及び2015年度総会を、2015年3月5日から8日の日程で、福島大学で開催いたします。小規模な地方大学の会場での開催ですので、例年のような立派な大会とはいきませんが、小規模ならではのオリジナリティとインパクトのある大会となるよう努力したいと思っております。多くの会員の皆様のご参加と、日頃の研究成果のご発表を心からお待ち申し上げます。

本大会のページを以下のアドレスで公開中です。大会に関する案内や最新情報・周辺情報をご覧になれます。是非ご覧下さい。

http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/~kurosawa/JSPS_fukushima2015/home.html

大会ロゴマーク（ビャッコイ）



[本会場] 福島大学 (福島県福島市金谷川1)

共通講義棟 : 口頭発表・総会・授賞式・授賞記念講演・公開シンポジウム

大学会館 : ポスター発表・懇親会

詳しいアクセスは下記リンクをご参照ください。

<http://www.fukushima-u.ac.jp/new/18-koutu/index.html>

[各種委員会会場] 福島大学生協レストラングリーン (編集委員会, 評議員会)

[日程] 2015 年 3 月 5 日 (木) ~ 3 月 8 日 (日)

3 月 5 日 (木) 午後 編集委員会, 評議員会

3 月 6 日 (金) 午前 口頭発表 (大会発表賞エントリー者)

午後 口頭発表・ポスターセッション

3 月 7 日 (土) 午前 口頭発表・ポスターセッション

午後 総会, 授賞式, 授賞記念講演

夜 懇親会 (場所 : 大学会館内福島大学生協)

3 月 8 日 (日) 午前 口頭発表

午後 公開シンポジウム : 標本および標本室に関する講演を予定しています。

3 月 9 日 (月) に希望者向けに福島大学共生システム理工学類生物標本室 FKSE 見学会を行います。見学および標本調査希望者は参加申込の際にお申し込み下さい。当日参加も歓迎です。

[第 14 回大会ホームページ] 大会準備の進捗状況やプログラムなど、情報を随時アップロードします。

[お問い合わせ先]

大会会長 : 黒沢 高秀

連絡先 : 日本植物分類学会第 14 回大会準備委員会

〒 960-1296 福島市金谷川1 福島大学共生システム理工学類 黒沢 高秀

Tel & Fax : 024-548-8201

E-mail : jsps2015fukushima@gmail.com (大会専用)

(お問い合わせの場合には、できるだけ専用電子メールをお使いください)

[発表の要領]

● 口頭発表 (一般講演)

発表時間は、講演 12 分、質疑応答 3 分の計 15 分です。口頭発表の際には液晶プロジェクターを使用しますが、発表用パソコンは各自ご用意ください。Apple 製品等、特殊な接続ケーブルが必要な場合は、各自ご持参ください。

スライドの作成に当たっては、色覚バリアフリープレゼンテーション法に関するサイト <http://www.nig.ac.jp/color> をぜひご覧ください。

● ポスター

ポスター用ボードのサイズは、横 90cm × 縦 180cm です。貼付用テープ等は大会準備委員会で用意いたします。6 日 13 時までに貼り付けを終えてください。会場の都合上、8 日 13 時までにポスターの撤去をお願いします。

[発表・参加申込方法]

大会には日本植物分類学会会員・非会員を問わずご参加いただけますが、口頭およびポスターで実際に発表する方は、特に依頼した場合を除き会員に限ります。非会員の演者は、申込と共に日本植物分類学会への入会手続きをお願いします。

第 14 回 大会 HP (http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/~kurosawa/JSPS_fukushima2015/home.html) から発表・参加申込書へリンクが張られていますので、用紙をダウンロードして必要事項を記入または選択の上、ファイル名を参加者本人の氏名としてください。記入した発表・参加申込書は、件名を「学会申込」としたメールに添付して、jsps2015sanka@gmail.com 宛に送信してください。

送信してから 3 日経っても（土日・祝日を除く）大会準備委員会から受信の返事がない場合は、メールの件名を「学会申込再送信（発表者氏名）」に変更した上で、同じメールを送信してください。電子メールを利用できない方は、本ニュースレター案内の 16 ページに掲載されている「発表・参加申込書」に必要事項を記入の上、大会準備委員会宛に郵送でお送り下さい。その際には、締め切り日にご注意ください。発表・参加申込のファックスによる送付は受け付けません。

[大会発表賞へのエントリー]

大会発表賞（口頭発表賞またはポスター発表賞）にエントリーされる方は、発表・参加申込書「8. 口頭発表賞・ポスター発表賞へのエントリー」の項目で、「(1) する」を選択してください。なお、大会発表賞へのエントリー資格のある方は、日本植物分類学会の会員で、パーマメント・ポストに就いていない研究者（年齢制限はありません）で、筆頭発表者かつ演者である方本人です。

[発表要旨]

発表要旨の原稿を以下の書式で作成し、MS（マイクロソフト）Word 2007（Windows）または MS Word 2008（Mac）で読み込み可能な形式で保存して下さい。大会ホームページに雛形があります。

発表題目、1 行空白、発表者氏名（かっこ内に所属）、1 行空白、要旨本文の順に記入し、実際に発表する演者の右肩に「*（半角）」を入れてください。1 行の文字数は全角で 41 字、発表題目を含めて 22 行以内にしてください。発表要旨に図表は使用できません。パソコンの機種に依存する特殊文字は、フォントの文字化けなどをおこすので使えません。原稿のファイル名は、発表代表者のフルネームとしてください。原稿ファイルは、件名を「発表要旨（発表代表者氏名）」とした電子メールに添付して、jsps2015youshi@gmail.com（メールアドレスが参加・発表申込と異なりますのでご注意ください）宛に送信してください。あるいはファイルの入った CD-R を下記住所まで郵送してください。

送信してから 3 日経っても（土日・祝日を除く）大会準備委員会から受信の返事がない場合は、メールの件名を「発表要旨再送信（発表代表者氏名）」と変更した上で、同じメールを送信してください。

なお、印刷の都合で体裁を変更する場合がありますのでご了承ください。MS Word を使って要旨原稿ファイルを作成することが困難な発表者の方は、大会準備委員会までご連絡ください。要旨の作成方法をご相談させていただきます。要旨のファックスによる送付は受け付けません。

[大会参加・発表申込の送付先・締め切り 担当 兼子伸吾]

送付先：〒 960-1296 福島市金谷川1

福島大学共生システム理工学類 兼子伸吾

E-mail : jsps2015sanka@gmail.com

発表者：発表・参加申込／大会・懇親会参加費，弁当代等振込 1月23日（金）必着

発表者以外：参加申込／大会・懇親会参加費，弁当代等振込 2月6日（金）必着

本大会では参加費割引を事前申込全体に広げました。2月6日を過ぎた振込は，大会・懇親会参加費が増額されますので，なるべくお早めにお申込ください。また2月7日以降は振り込まず，当日参加をご利用ください。

[要旨原稿の送付先・締め切り 担当 兼子伸吾]

送付先：同上

E-mail : jsps2015youshi@gmail.com（参加・発表申込先とは異なります）

E-mail, CD-R 郵送共に2月6日（金）必着。

[参加費送金先]

郵便振替口座番号：02250-1-114665

口座名義：分類学会福島大会準備委

送金には同封（または郵便局備え付け）の振込用紙を使用し，必ず振込金額の内訳（大会参加費，懇親会参加費，弁当代等）を通信欄に記入してください。また振込者と参加者は同一にしてください。参加申込の際に，振込の日付と振込郵便局名が必要になりますので，必ず，参加申込前に振込を終えてください。振込手数料はご自身でご負担ください。

[懇親会]

福島大学生協で行います。酒類の持ち込みが可能です。各地の日本酒等，皆様からの差し入れを歓迎いたします。

[参加費]

大会参加費（発表要旨集1冊代金を含む）：

学部学生，高校生等は参加費・要旨集一冊無料

事前申込（2月6日までの振込） 一般 3,000円 学生（院生以上）1,000円

当日参加申込 一般 4,000円 学生（院生以上）2,000円

追加発表要旨集： 一冊 1,000円

懇親会参加費：

2月6日までの振込 一般 4,000円 学生 2,000円

当日参加申込の場合 一般 5,000円 学生 3,000円

3月8日昼食弁当 800円

3月8日の昼食弁当は予約制です。参加申込の際に一緒にお申込ください。

[昼食]

大会期間のうち、5～7日は大学生協食堂が営業しています（予定営業時間平日・土曜日 11:00～14:00）。日曜日の8日は休みですので、お弁当を準備します。予約個数のみを用意しますので、参加申込時にあわせてお申込ください。なお、大学周辺にはコンビニエンスストア1軒と小さな飲食店4軒があるのみです。

[託児室について]

本大会では託児室の開設は行いませんが、子どもが遊べる小規模なスペースを確保する予定です。

[ネットワーク]

本大会では大会専用のネットワークを準備致しません。

[マイバッグ、マイマグカップ]

マイバッグおよびマイマグカップ持参の方に、もれなく福島銘菓1個を差し上げます。参加申込と共に申し込み下さい。ゴミの減量にご協力をお願いします。

[植物分類学関連学会、研究会、同好会展示コーナー]

3月6日（金）から8日（日）午前中に、植物分類学関連学会、研究会、同好会の活動を紹介するための展示コーナーを設けます。出展者のために長机とイスを準備します。個人での出展も可能です。出展は無料です。出展を希望する方は参加申込と共に申し込み下さい。参加申込以降の申込も受け付けますので、ご相談下さい。

[標本展]

本大会では、新たな試みとして標本展を行います。展示ご希望の標本がありましたら、発表・参加申込の際に「発表・参加申込書」ファイルの標本展の欄に標本枚数をご記入の上、メールで送信してください。電子メールを利用できない方は、「発表・参加申込書」に標本枚数をご記入の上、大会準備委員会宛に郵送でお送りください。展示する標本は基本的に一人5枚までとさせていただきます。これ以上の枚数の出展を希望される場合は、担当までご相談ください。なお、展示後、お送りいただいた標本は返却せず、福島大学共生システム理工学類生物標本室（FKSE）に収蔵させていただきますが、研究の都合など特に希望がある場合は、北海道大学 SAPT、東北大学 TUS、国立科学博物館 TNS、東京大学 TI、または京都大学 KYO に収めます。

標本展示ご希望の場合は、大会 HP から標本展ラベルデータファイルをダウンロードし、採集地、採集者などをご記入の上、ファイル名を参加者の氏名 + 標本データ（例「安藤真弓標本データ」）としてください。記入したファイルをメールに添付して、2月6日までに jsps2015sanka@gmail.com 宛に送信してください。電子メールを利用できない方は、本ニュースレター案内の18ページに掲載されている「標本展ラベルデータ用紙」に必要事項を記入の上、2月6日までに大会準備委員会宛に郵送でお送りください。

標本は、2月6日までに、新聞紙に挟んだ状態で以下までご送付ください。ラベルの作成と台紙への貼り付けは福島大学で行います。送料はご負担いただきますよう、お願い致します。ご質問などがありましたら、標本展担当までご連絡ください。

[標本展の標本送付・連絡先 担当 首藤光太郎]

標本送付先：〒960-1296 福島県福島市金谷川1 共生システム理工学類 黒沢研究室 首藤光太郎

E-mail : kohshutoh@gmail.com

送付締め切り 2月6日(金) 必着。

[公開シンポジウム]

日時：3月8日(日) 午後

標本および標本室に関する講演を予定しています。詳細は大会ホームページや次号ニュースレターでお知らせします。参加は無料です。

[標本室見学・標本調査]

日時：3月9日(月)

希望者向けに福島大学共生システム理工学類生物標本室FKSE見学会を行います。おおまかな希望者数を把握するために、見学および標本調査を希望する方は参加申込と共に申し込み下さい。当日参加も歓迎です。参加は無料です。

[宿泊施設]

宿泊に関しては各自でご予約ください。会場からは福島駅周辺が公共交通機関での移動に便利です。また、福島交通飯坂線飯坂温泉駅周辺まで移動可能圏です。震災復旧事業等で宿が取りにくい状況が続いていますので、予約はお早めにお願ひします。宿泊予約サイトで予約が取りにくい場合は、福島市旅館ホテル協同組合 (<http://www.fukushima-yado.com/>)、福島県旅館ホテル生活衛生同業組合 (<http://www.fukushimaryokan.com/>)、飯坂温泉観光協会 (<http://www.iizaka.com/>) などをご利用下さい。

[大会会場へのアクセス]

会場である福島大学への公共交通機関は以下の通りです。大学構内への自家用車の乗り入れは可能ですが、できるだけ公共交通機関をご利用下さい。

JR福島駅から：東北本線上り郡山方面行きに乗り「金谷川」駅で下車。徒歩約10分。電車の本数が少ないので、時刻表をご確認ください。

会場へのアクセスの詳細は下記リンクをご参照ください。

<http://www.fukushima-u.ac.jp/new/18-koutu/index.html>

[コンベンション開催支援事業助成に関するお願い]

大会会費を安く抑えつつ、充実した大会にするために福島県コンベンション開催支援事業助成に応募しています。福島県以外の方は、住所のある都道府県名および大会会期中(5, 6, 7日泊のみ。4日と8日泊は含まず)の福島県内での宿泊予定数を申込時にお知らせ下さい。また、氏名と都道府県名および宿泊数を福島県観光物産交流協会に報告することをご了承下さい。

日本植物分類学会第14回大会（福島大会）「発表・参加申込書」

必要事項を記入または選択の上、ファイル名を申込者氏名にして

jsps2015sanka@gmail.com宛に送付。発表の申込締め切りは1/23です。

1. 名前（ふりがな、またはローマ字）：
2. 所属：
3. 所属の短縮表記：
4. 連絡先住所：〒
5. Tel & Fax:
6. E-mail アドレス：
7. 研究発表
 - する：（1）口頭発表（2）ポスター発表（3）どちらでも良い
 - しない：（3）発表しない（4）共同研究者が発表する
（発表者氏名）
8. 口頭発表賞・ポスター発表賞へのエントリー（1）する（2）しない
9. 発表タイトル：
10. 全発表者氏名・所属（演者の右肩に*印）：
11. 全発表者氏名のローマ字表記：
12. 現在求職中の表示の希望（1）希望する（2）希望しない
13. 大会参加費（振込は2月6日までに行ってください。それ以降は当日参加扱いとなります）
円
一般 3,000 円 学生（院生以上） 1,000 円 学部学生・高校生等無料
14. 懇親会（1）参加する（2）参加しない
15. 懇親会費（振込は2月6日までに行ってください。それ以降は当日参加扱いとなります）：
円
一般 4,000 円 学生 2,000 円
16. 3月8日（日）昼食弁当代 800 円： 円
17. 13, 15, 16 の合計金額： 円
18. 振込郵便局名： 郵便局
19. 振込日： 月 日
郵便振替口座番号：02250-1-114665
口座名義：分類学会福島大会準備委
20. マイバッグおよびマイマグカップ（1）持参しない（2）持参する
21. 植物分類学関連学会、研究会、同好会展示コーナー
（1）出展する（2）出展しない
団体名（個人の場合は展示名）：
22. 標本展への標本出展
（1）出展する（標本枚数 枚：5枚以下）（2）出展しない
23. 3月9日（月）の福島大学共生システム理工学類生物標本室見学会・標本調査
（1）参加する（2）参加しない
24. 福島県コンベンション開催支援事業助成を受けるために以下の情報収集にご協力下さい。福島県に住所のある方のご記入は不要です。
住所のある都道府県：
大会会期中（5, 6, 7日泊のみ。4日と8日泊は含まず）の福島県内での宿泊予定数：

標本展ラベルデータ用紙

- ・以下の記入例をご参考に、次ページにご記入下さい。
- ・出展数は一人5枚までです。5枚以上の出展を希望される場合は、担当までご相談ください。
- ・緯度経度、標本番号など、不明な点があれば、空欄のまま構いません。
- ・詳細な住所が不明な場合は、おおよそで構いません。
- ・欄が不足する場合は、拡大コピーしていただいて構いません。
- ・盗掘の恐れがある種類については、採集地を隠すことが可能です。担当までご連絡ください。
- ・ご質問や不明な点があれば、担当までお気軽にご連絡ください。

例：和名 ヒトツバイチヤクソウ 採集日 2013年7月22日
 学名 *Pyrola japonica* Klenze ex Alefeld var. *subaphylla* (Maxim.) Andres
 採集者（日本語）首藤光太郎・兼子伸吾・黒沢高秀 標本番号 380[あれば記入]
 採集者（英語）Kohtaroh Shutoh, Shingo Kaneko, & Takahide Kurosawa
 採集地 福島県 耶麻郡 北塩原村 松原 剣ヶ峯 [県名から住所を順に記入]
 緯度 37° 40′ 36″ N 経度 140° 04′ 16″ E [60進法で記入]
 ノート [具体的な採集地、環境、形質など]
 松原湖畔探勝路、アカマツ林、花の色：白、花茎の色：赤

例：和名 モミジイチゴ 採集日 2014年8月4日
 学名 *Rubus palmatus* Thunb. var. *coptophyllus* (A.Gray) Kuntze ex Koidz.
 採集者（日本語）首藤光太郎 標本番号 720
 採集者（英語）Kohtaroh Shutoh
 採集地 福島県 福島市 渡利 愛宕下～大波 八才子
 緯度 37° 43′ 12～51″ N 経度 140° 30′ 16″～31′ 17″ E
 ノート 愛宕神社―大波の遊歩道沿い。高さ1mの低木、花は白。

希望する収蔵先（もしあれば）

北海道大学 SAPT, 東北大学 TUS, 国立科学博物館 TNS, 東京大学 TI, 京都大学 KYO

標本展ラベルデータ用紙（記入用）

1. 和名		採集日
学名		
採集者（日本語）		標本番号
採集者（英語）		
採集地		
緯度	経度	
ノート		
2. 和名		採集日
学名		
採集者（日本語）		標本番号
採集者（英語）		
採集地		
緯度	経度	
ノート		
3. 和名		採集日
学名		
採集者（日本語）		標本番号
採集者（英語）		
採集地		
緯度	経度	
ノート		
4. 和名		採集日
学名		
採集者（日本語）		標本番号
採集者（英語）		
採集地		
緯度	経度	
ノート		
5. 和名		採集日
学名		
採集者（日本語）		標本番号
採集者（英語）		
採集地		
緯度	経度	
ノート		

希望する収蔵先（もしあれば）

北海道大学 SAPT, 東北大学 TUS, 国立科学博物館 TNS, 東京大学 TI, 京都大学 KYO

第 30 回国際生物学賞記念シンポジウム開催のお知らせ

細矢 剛 (国立科学博物館)

国際生物学賞は、昭和天皇の御在位 60 年と長年にわたる生物学の御研究を記念するとともに生物学の奨励を図るため昭和 60 年 (1985 年) に設けられました。このたび第 30 回 (平成 26 年度) の受賞者として、ピーター・クレイン博士 (イエール大学) が決定しました。

博士は、世界に先駆けて古生物学と現生植物の情報を統合して、植物の系統・進化史を研究し、植物の系統解析研究をリードされてきた方で、今回の受賞を記念して、以下のシンポジウムを開催いたします。

●平成 26 年 12 月 2 日 (火) 10:00 ~ 17:30 【研究者、大学生・大学院生等対象】
日本学士院 (東京・上野) にて、クレイン博士の特別講演や、動物・植物・菌類・古植物の分類と進化に関わる世界の先端的研究者による生物の多様性と系統・進化に関する講演会 (言語: 英語, 特別講演のみ同時通訳) を行います。

Session I. Zoology

Reconstructing the animal tree of life in the era of genomics / Gonzalo Giribet (Harvard University)

The tree of life in the light of the discoveries of the three new phyla, Loricifera, Cyclophora and Micrognathozoa / Reinhardt M. Kristensen (University of Copenhagen)

Session II. Mycology

Phylogenomics of wood decay fungi and the "End of the Carboniferous" / David S. Hibbett (Clark University)

A parasitic root on the fungal tree of life inferred using phylogenomics / Timothy Y. James (University of Michigan)

Session III. Botany

Genome duplication and angiosperm diversification / Pamela S. Soltis (University of Florida)

Ancestral traits and specializations in the flowers of the basal grade of extant angiosperms / Peter K. Endress (University of Zurich)

Session IV. Paleobotany

Late Mesozoic pre-angiosperm vegetation / Patrick S. Herendeen (Chicago Botanic Garden)

Fossil flowers: New insights in angiosperm evolution / Kaj R. Pedersen (University of Aarhus) and Else Marie Friis (Swedish Museum of Natural History)

Special Lecture by the prize winner

Paleobotanical data and the origin of flowering plants / Peter Crane (Yale University)

※この他 12 月 3 日 (水) には一般の方対象の講演会 (言語: 日本語) も予定されています。

本シンポジウムへの参加は申し込み制 (先着順) で、11 月 20 日 (木) が〆切となっています。

申し込みフォーム及び詳細情報は下記の web サイトにあります。

<http://www.kahaku.go.jp/event/2014/12sympoBio30/>

